如何に生く可き乎

宇佐美錬昌

耶蘇は『空飛ぶ鳥に塒あれど人の子の吾れに宿なし』と叫び、宗祖は『日本六十六箇國島二つの内に五尺に足らざる身を一つ置く所なし』と述懐されて居る。それは悟り切つた聖者でさへ余りにも痛々しい人生悲劇であつたに相違ない。況して我等凡夫が寢るに宿がなく働けど働けど充分なパンも得られないとしたらそれは切實な人生苦であらねばならない。

ユーゴーの名作 レ●ミゼラブルは語る、空腹に耐えかねた青年、ジャンバルヂャンはたつた一片のパンを盗んだが爲に拘引され、これが動機となつて終に大罪人となり果て社會の暗黑面にたゝき込まれることを。併し我々は此の小說を只一篇の物語と觀てはならない。現實は如何に多くのジャンバルヂャンを生み出し彼等を社會の一隅に葬つて行く乎。我等は暗膽たる許りである。然しながら金殿玉樓に歌詠亂舞し錦繡を纏ひ飽食する者にも脫し得ぬ惱みはある。愛を失つた悲み、病の苦、去り行く青春の悶、死の驚愕等々枚擧に遑がない。望ち月の缺けたることなしと謳つた藤原氏も衰亡し、一人で萬里の長城を築き上げた豪邁な始皇帝は不老不死の妙藥を求めやうと苦心したが終に死の魔手を逃れ得べくもなかつた。げに生くることは苦しい事實である。斯くて人々は如何に生く可き乎といふ人生課題を眞劍に考え其の謎を解かんと努力した。そして人々は其の課題に答へ得る世界を宗教に、藝術に、戀愛に、享樂等々に求め續けた。斯く人により求むる對象はそれ〴〵違ふかも知れないが其の對象を通して幸福を求むるといふ点に於ては萬人共通で

あつた。然し求めよ與えられんの垂訓通り易々と幸福は我等のものとはならなかつた。

近世、科學の發達は急速な進歩をなし確かに人生生活に多大な貢献を齎らした。これに依り人々は科學の世界こそ我等の求むる絶對唯一のものだと信ずる者も續出した。科學は飽迄人間の知識に依つて文化現象、自然現象を究明しその所産として人生社會を有益にした。

然し如何に優れた科學と雖も永生を望む人間の根本慾望を滿たしては呉れなかつた。宇宙の無限に較ぶれば人間の一生は余りにも儚ない槿花一朝の夢に過ぎない。靜かに思索冥想すれば如何に現實が幸福でも眞の滿足を得られない。現代は只往昔の如く生老病死の四苦のみではない。前にも述べし如く生活苦の目前の惱みがある。正に苦の二重奏である。爰に我等は科學のみでは永生の幸福を求め得られない事に想到した。

今夏、身延山夏期修養會に於ける法主猊下の訓話中、科學を評した適切な例話を拜聽した。曰〝『西洋の或る科學者が左の如き宿題を學生に提示した』

『諸君は家庭に歸つたなら母親の流した涙を分析して余に示せ』と。學生はそこで時を得て母が子供の爲に流した涙を分析して先生に答へた、曰〝『鹽素と水素の二原素のみ』と。其の時、先生は莊重な態度を以て學生に教訓したのである。

『諸君！　人の涙は科學的に分析すればそれは諸君が實驗した通り洵に簡單な二原素にすぎない。然し吾等が科學の領域を岐れて考えて見た時、世の慈愛深い母親が子供の爲に流した涙は單なる鹽素でもなければ水素でもない。それは吾々が測り知る事の出來ない深い愛情の含まれた尊いものである。涙に含まれた原素は物質的には安價なものであるが其の母の尊い愛情に於ては千萬圓と雖も購ふことは出來ない』と。

此の挿話は科學の世界を超えた所にも微妙な人生生活の奥所のある事を物語るものである。此の人生の奥所に潤ひを與へ解決の手を指しのべるのが宗教である。宗教

は闇の中から光を、苦惱の中から歡喜を見い出す人生最高の安息所である。レーニンは『宗教は阿片なり』と罵倒排擊したが現在ソヴエツトの民衆はレーニンの銅像に額き香華を焚いて宗教的禮拜をなし隨喜渴仰の泪にくれてゐるといふ。世の無宗教主張者よ！　此の大きな矛盾をなんとする。現實の姿は否定すべくもない。

カントは『信仰に地位を與へんが爲に智識を止揚せざる可らず』と述べ、シユライエルマツヘルは『宗教とは絕對依憑の感情なり』と言つて居る。茲に儼として諸科學と宗教の分岐が存する。

現代一般インテリ階級にとつて理論を超越し思惟から離れた世界を肯定する事は許されないかも知れない。然し微妙極まる人生に於ては只理論や智識では忖度するを得ない事實が余りにも多すぎる。茲に我等は現實を肯定し且又未來に生くる所謂永生に住し人間本然の叫びに應じ得るものこそは宗教であると確定しなくてはならないあらゆる苦を脫せんとして想到した如何に生く可き乎といふ人生課題に於て我等は宗教生活に生くることこそ生く可き方法であり最後の生活態度であると決論したい。

『現代の英雄』それは宗教に依つて甦つた後半世に於ける、ヂヤンバルヂヤンの男々しき姿でなくてなんであらう。斯くて得られた宗教信仰は我々の生々しい生活の息吹の中に織り込まれては日常生活の一擧手、一投足皆之れ歡喜の焰となり法悅の光となつて憎惡、悲泣、苦惱を燒盡し人生永遠の常闇を照すであらう。

要之、我等は一部の科學者、哲學者が築き上げた唯物史觀的人生では滿足が出來ず理想主義の世界、就中宗教のもつ理想鄕への眞實一路の白道をたゆみなき努力を以て歩み續けよう。